

# 平成26年度事業報告書

特定非営利活動法人 アニマルクラブ石巻

## 事業の成果

震災から3年が経過すると、そこに暮らす人々の生活も大きく分かれたように感じます。新しい家や仕事に馴染み、地に足の着いた生活を始めた人達と、被災を引きずり、失った暮らしを取り戻せないままの人達があります。寂しさゆえに動物を飼ったり、野良猫に餌付けをしたりした人は、責任が取れなくなり、「誰かに何とかして欲しい」と言って来ます。そう言えば、手を差し伸べてくれるサービスがあって当然と思い込んでいる『被災者慣れ』を感じることもあります。

仮設住宅に住んでいるのに、猫を10～30匹までに増やしてしまった人達…「避妊手術の費用がなかったから」と言い訳しますが、ますます増えれば猫も不幸になるし、近所迷惑も増大するので、費用を赤字にならないギリギリに設定して、とりあえず手術してしまい、分割で支払ってもらう約束をしたのですが、どの人もほとんど払っていません。その上、多頭飼育の猫たちは慢性疾患を持っていることも多く、避妊・去勢手術の際に見つけて治療することもあります。そうなれば、さらに多くの借金をアニマルクラブが負担する結果となります。

利益を追求する事業であれば、こういう人達とは関わりません。しかし、そこには不妊手術や病気の治療が必要な動物がいて、飼い主は必要なことを施すことができないのです。人間であったなら、福祉事務所や健康保険があります。子供を養育する能力のない親に代わって、護り育てる施設もあります。社会は、子供たちに「動物も人間と同じように命があるから、大切にしなければならない」と教えますが、かけ声に留まっていると言わざるをえません。「遺棄したら100万円以下の罰金、虐待したら200万円以下の罰金」と動物愛護法が変わっても、実際に起きた虐待事件にも、警察は調書を取るだけで、容疑者を呼び出すこともしませんでした。

本来は、収益を、アニマルクラブに収容している行き場のない動物たちの生活費にも回せば…という目的もあって始めた不妊予防センターですが…震災後は赤字収支が続いて、収容動物に回すどころか、逆に公益事業の収入で、費用を払ってくれる人のない動物たちの医療費を助成しているのが現状です。

さらに、スタッフを派遣してくれている動物病院も人手不足になり、平成26年12月より週2日の開院が当分の間、週に1日しかできなくなり、朝から夜まで大変忙しくなりました。噂を伝え聞いて、遠方からも様々な相談が来ます。それだけ動物は人間にとって身近でかけがえない存在でありながら、問題を解決できないでいる人達が大勢いるということです。

毎日アニマルクラブの活動に時間と労力を費やしていますが、報酬はありませんので、生活費を得るためには別に働かなければなりません。ですから、後継者など望めるはずもなく、この点は、たとえ収益事業で収入を伸ばしたとしても、医療現場という性質上、利益はまず、お金を出してくれる人のない動物への助成と設備投資に回るでしょうから、我々が職員となって、報酬をもらうことはあり得ないと思います。

やはり、動物福祉は行政が取り組むべき問題であり、ボランティアが担えるのは《これまでの経験を生かしたサポートとアドバイス》だと認識しています。法律が変わっても、市役所や保健所の職員がノウハウを把握・実践できていないと感じます。「市役所に野良猫の相談をしたら、捕獲して処分はできないから、アニマルクラブに相談してみたら…と電話番号を教えてもらった」というような電話が、時々かかってきます。丸投げでは何も覚ええないから、早く、体裁ではない《連携》を実践してもらわないと、我々ボランティアは力尽きてしまうかもしれません。

次々相談が来る課題に、日々、できるところまで対応しています。26年度成果を上げたといえるのは、野良猫のTNR (Trap Neuter Return)＝「捕獲して、不妊手術を施し、元に戻す」という活動だと思います。

津波を逃れて高台に逃げたのは人間ばかりではありません。石巻市の日和山には、被害の大きかった門脇方面からたくさん猫が登り、あちこちで繁殖して増えた、と言われていました。まず、エサを与えている人と話し、「不妊手術をして、地域猫として面倒を見続けて欲しい」と頼みますが、責任を取りたくない、お金は出たくない人が多いです。協力者のいるエリアからTNRが進んでいます。

また、被災地では災害復興住宅の建設も進んでいますが、ペット可の公営住宅が少ない、あっても市街地から離れているから、適当な住まいが決まらず、仮設住宅に残留している人達があります。特に、車を運転できない老人などは、買い物や通院もできなくなるから、街から離れた所では生活して行けません。一人暮らしの老人やうつ病などの病身の方、生活困窮者…弱者を傍らで支えている動物たちにも配慮した復興支援を求めます。

そして、26年9月には不妊予防センターに、エコー診断装置を購入しました。これにより、聴診や血液検査だけではわからなかった内臓の状態を診ることも可能になりました。不幸な動物たちを救うには、愛と勇気と、そして医療が必要です。医療スタッフがいてくれたら、もっと多くの動物たちの命と幸せを守れます。





